

「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所

〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757

電話連絡先 0282-22-7079(増田)

Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp



224号

2026年5月21日発行

「憲法守れ」の声高く、スタンディング実施！

5月3日（祝）憲法記念日に

五月晴れの5月3日、「憲法守れ」の思いを持った人たちが集まり、スタンディングをしました。

自分の思いをプラカードにして持参した人や、SNS でこのスタンディングを知って初めて参加したという若者もいました。

参加団体から代表者などが、マイクで自分の思いを訴えました。その中に初めてスタンディングに参加したという若い女性



は、憲法への熱い思いと核廃絶についても触れ、最後に「憲法守れ！」「改憲反対！」のシュプレヒコールをリードして、会場を盛り上げました。

憲法が制定されて、79年目。今までも解釈改憲により、かなり傷つけられています。9条はまだまだ本領発揮。トランプのイラン攻撃にも、自衛隊を派遣せずにすんでいるのは、9条があるおかげ。高市政権になって、改憲の動きが急になっていますが、それに負けないよう、「憲法守れ」の声を大きく

上げ、改憲の動きを阻止していきましょう。

この日は東京でも「憲法守れ」の集会が開かれ、5万人もの人が集まって、声をあげました。もっと多くの声を集めて、改憲の動きを止めていきましょう。

「市民の力が大切！」伊藤さん力説す

憲法記念日 伊藤千尋さんの講演を聞いて

健康の森で、伊藤千尋さんの講演会があり、参加しました。講演で印象に残ったことのひとつは、9条の発案者が当時の内閣総理大臣、幣原喜重郎氏だったということです。そのことは資料にも残っているそうで、幣原氏は、自分の発案では賛成を得られないのでアメリカ側に依頼して、そこからの提案にしたということでした。

また、この9条は世界の人々にも共感を呼び、コスタリカでは、軍隊を持たない国として、軍事費を教育費に回すなどしていることなどが紹介されました。日本では、軍事費が年々上がり暮らしを苦しめ

ているのにうらやましい限りです。

9条の碑は、日本でも多くのところで建てられており、この碑は、建てることの大切さとともに、その碑を中心に「9条を守れ」の思いを集約する場でもあると語っていました。

伊藤さんが特に強調されたのは、市民の力です。自民党が圧勝し、高市政権になって、改憲の動きが急になっていますが、それを打ち破るのは、市民の力だといっていました。市民がいろいろな形で声をあげていくことが政治を動かすとも言っていました。展望と力をもらった講演会でした。（板橋千代子 記）

- ◆ スタンディング 6月9日(火)市役所前 6月19日(金)イオン・カワチ前 16時より
- ◆ スタッフ会議 6月11日(木)くらら4階 6月26日(金)くらら2階 13時30分から

戦争の時代を生きた「証」 ～平和を願って歩み続けて～



増田千代子（宮城県名取市在住） 記

前月号（223号）の続き・・・。

【軍事部での避難生活と引き揚げ】

やむなく軍事部住宅での生活となったが、隣には吉林指導大学学長さん一家が住んでおり、同級生の玲子さんもいたので安心した。小岳さんは大分県のお寺の息子さんで、父を慕って参禅に来ていた方だった。毎朝馬に乗って市内を巡回しており、珍しい食べ物を分けてもらうなど、私たち子供にとって大好きな小父さんで、帰郷後もお世話になった。

引き揚げが始まるまで、家に入ったりしていた満人の方々には親切にしてもらった。父を慕っていた人々だった。その後、父の友人たちが次々と来てくれ、弁護士の内田仙二さんを中心に「吉林市民を守る会」が結成され、日本との連絡もつき、引き揚げの準備が進められた。

しかし、引き揚げが始まったのは翌年の夏以降だった。

【過酷な船旅と佐世保での出来事】

帰ることがほぼ決まり、計画が作られてからは、大家族のように肩を寄せ合って暮らした。父の弟子や親戚など、16人もの人々が一緒に住み、食べ物もなんとか不自由せず引き揚げを待った。

葫蘆島在留日本人大送還が始まり、吉林省から葫蘆島に貨車で運ばれる途中、何度も満人による盗難に遭い、怖い思い

をした。ようやくアメリカの貨物船（リバイ）に乗って出発した時は、大きな安堵感に包まれた。「さらば中国よ、さらば吉林よ」と祈り、船底での5日間の後、佐世保に到着したのは良かったが、船内でコレラが発生し、延長38日。これには参った。さらに母が栄養失調で倒れ、病院に収容された。「千代子、頼むよ」と言われ、兄弟5人、心細かったが、親戚やお手伝いの人もおり、皆で乗り切った。

船上で亡くなった方は菰に包まれ水葬された。初めて見る水葬にショックを受けたが家族は涙ながらに見送っていた。

佐世保での約一ヶ月の後、ようやく下船が許され、「DDT」という虫除けの粉を浴びて宿舍へ移動した。母が入院していた病院が近く、会いに行くことができた。母は、入院中に米やさつまいもや鍋までも集めてベッドの下に貯めこんでいた。病院の係の人に聞いて、石でかまどを作り、調理して皆で食べた。ゴマ塩のおにぎりが、涙が出るほど美味しかった。

【故郷への長い道のり】

二日目の朝、佐世保から汽車に乗って東京へ向かった。鈍行だったが、引き揚げ列車でノンストップだった。品川駅に着くと、「千葉さん、千葉さん」と連呼し

走ってくる男がいて、父が窓を開け「藤田、帰って来たぞ」と叫ぶとその人は「よかった、よかった」と薬瓶に入れたお酒で乾杯した。上野駅では、母の兄である秋葉今助伯父さんが待っていてくれ、白米のおにぎりと煮物をいただいた。母は、周りにいた子供達におにぎりを分け与えていた。伯父は上野駅に何度も行つて引き揚げ列車の到着時間を確認していたとのこと。皆の親切は有難く、今も忘れない。

上野を出た列車は仙台から一関へ。ここで、親戚の及川さんが私たちを出迎えてくれ、温泉へ行ったり、帰朝歓迎会を企画してくれたり、温かい歓迎を受け、まるで自分の娘のように可愛がってもらい、本当に嬉しかったのを覚えている。千代子14歳の時である。

こうして、多くの困難を乗り越え、ようやく気仙沼駅に降り立つと、伯母が食糧を山ほど持ってきて出迎えてくれた。皆で近くの食堂でお昼を食べ、父の友人のタクシー会社の大型タクシーに乗って、本吉町津谷の峰仙寺に帰宅した。父が育った家によりやく帰ってきて、本当に安心した。

無事に帰ってこられたこと、そして周りの人々の温かさにとにかくただ感謝するばかりである。

